

要 旨

氏 名 馬場 さおり

題 目 ハンナ・ウィルケの研究 — 「Intra Venus」の写真作品を中心に —

要 旨

○本研究の目的

ハンナ・ウィルケ(1940～1993)の写真作品<Intra Venus>をつうじて、人間写真の大きなテーマと成りうる病、とくに女性特有の病気によるすがた、さらに生命の危機のすがた、といったものがいかに表現されたのかを考察することであった。

これまで日本においてハンナ・ウィルケの研究は、ほとんど行われておらず、英文の文献やホームページによるアプローチであったことは、研究者にとって大きな課題であった。そうした史料から、ハンナ自身の考えを示す言葉をさがした。こうしたハンナの言葉と研究者の写真家としての考え、病気の体験とを重ね合わせて、ハンナの作品理解をおこなった。

ハンナ・ウィルケはニューヨークを中心に活動した芸術家である。若い頃より、ヌード・ポートレートやパフォーマンス・アートなどの活動を行ったが、母セルマ・バターの乳がんの発病から、その闘病のようすを写真作品におさめた。さらにハンナ自身が悪性リンパ腫を患うにおよび、自身を被写体として撮影した。このハンナの闘病の様子を撮影した写真作品が<Intra Venus>である。

<Intra Venus>は、単に病気の人を撮影した写真集ではない。抗がん剤の副作用により、女性が性的象徴ともいえる頭髮を失い、さらに命も喪失するという生、性について他者ではなく、自身を被写体にした作品である。そこにはカメラをつうじて、自身を語る女性がいる。「彼女」は、写されることを前提に病を示し、生を謳歌するように見える。

研究者はハンナやハンナの母セルマと同じく、ガンを患った。そして、闘病のなかで、自身を被写体として写真に撮影した。このことにより、<Intra Venus>でハンナが表現したこと、その背景について、気づいたことが多くあった。

それは<Intra Venus>に写された被写体は、創られた姿であったということである。つまり闘病の日常ではなく、被写体として「病気の女性」を演じるすがたであった。しかし、それが「ガンを患った女性」、「生命の危機を背負った人」を高らかに主張する。これこそが芸術家ハンナが創造した作品であった。

こうして考察の裏づけとして、研究者の闘病の経験とその間に自信が被写体となって撮影した写真（これは作品として発表した）によって、病と向き合ったことが大きい。

性の象徴を奪われる、あるいは命の危機にさらさせる病気をテーマにした芸術の中で、写真はいかにも「真実」を伝えるようだが、<Intra Venus>は創作の産物であった。そして、ハンナ・ウィルケの意図、主張を込めた。その意志は被写体となった写真家自身のすがたが物語っている。

○研究者自身の作品

研究者は自身の姿を撮影した写真群を<2.7%～若年性乳がんを発症した私～>として、発表することにした。それは、作品として意図的に制作したものではなかった。それだけに<Intra Venus>のなかのハンナ・ウィルケとの違いを大きく感じた。それは写真という媒体をとおして「病」という、多く見かける「健常」とはことなる様相の中で、被写体として写真家自身が「生きる人としてのすがた」を表すときに、特別な意識をもって撮影し、作品を制作することで、記録写真とは違うアートとしてのアプローチもあるということを学んだ。そのほかの<The View Through My Blood～今、私が見ている世界>などの作品の中の人物像の多くは、外国人留学生、あるいはジェンダーの観点からマイノリティーと呼ばれるひとびとである。研究者が表現しようとしたのは、彼女ら彼らの一瞬の表情やしぐさにあらわれる、「真のすがた」である。

以上、ハンナ・ウィルケの写真作品と研究者自身の作品の考察をおこなった。ハンナの作品は、いかなる状況でも写真家という自覚を持ち続けるという意味で研究者の作品制作を進めるうえで大きな指針となった。
